

Title	現代新聞における略語の使用と定着に関するコーパス言語学的研究
Author(s)	Kudoyarova, Tatiana
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59384
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏 名	クドヤローワ タチアナ KUDOYAROVA, TATIANA
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 5 3 3 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 24 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	現代新聞における略語の使用と定着に関するコーパス言語学的研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 石 井 正 彦 (副査) 教 授 渋谷 勝己 教 授 青木 直子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、現代の新聞において、略語がどのように使用され定着していくのか、その定着・不定着を決める要因はいかなるものであるかを、コーパス言語学の方法にもとづいて調査し、考察したものである。論文の本体は、序論・本論 4 章・結論から構成され、全体の分量は、A 4 判 178 頁、400 字詰め原稿用紙換算約 630 枚である。

序論では、略語に関する先行研究を概観し、従来の研究の多くが略語の造語論的側面や位相論的側面に注目したものであるのに対し、実際の文章・談話における略語の使用実態と定着過程を記述し、略語がなぜ使われ、定着するのかを明らかにする実証的な研究が必要であることを述べ、本論文の目的を「現代の書きことばを代表する新聞というレジスターにおける、略語の使用特徴、原語・略語の共存関係とその変化、略語の定着傾向とその特徴を解明すること」と定める。

第 1 章では、調査の対象と資料（コーパス）とについて検討し、前者については、略語辞典・略語集の類やインターネット上の文書・リストなどを幅広く利用して、特定の分野に偏らない、一般人の認知度が高い略語を選定するという方針を述べ、後者については、

書き手の個性に依存する文学作品や、専門領域に限られる傾向の強い雑誌類ではなく、広く一般に流通し、また、経年的な調査にも耐える新聞のテキスト（『朝日新聞』の23年分（1984-2006）のコーパス）を資料として、略語の使用・定着を記述する方針を述べる。

第2章では、略語と原語とがその使用においていかなる関係にあるか、その一般的な変動傾向を見出すために、原語・略語のペア30組について経年的な量的調査を行い、(1) 略語が原語を圧倒するタイプ、(2) 略語が原語より優勢であるタイプ、(3) 略語が原語を上回るタイプ、(4) 略語が原語と拮抗するタイプ、(5) 略語が原語を上回らないタイプ、(6) 略語が増えないタイプ、(7) 略語が殆ど使用されないタイプ、(8) 略語が不規則に増減するタイプの、計8種の類型をとりだす。

第3章では、略語が原語を上回るタイプの代表例として「コンビニ／コンビニエンスストア」をとりあげ、略語・原語の選択に影響を与えらると思われる、新聞紙面の別、記事の長さ（文字数）、記事の中での出現箇所、語彙的コロケーション（連結パターン）、カテゴリー的意味といった諸要因との関連を調査して、略語「コンビニ」が定着しつつある要因を探る。

第4章では、略語が原語を上回らないタイプの代表例として「携帯（ケータイ）／携帯電話」をとりあげ、前章と同様の調査を行って、略語「携帯（ケータイ）」が定着に至らない要因を探るとともに、「コンビニ」と「携帯（ケータイ）」との共通点と相違点について考察する。

結論では、以上の調査・分析の結果をまとめるとともに、略語の使用と定着に関する記述的研究の意義を確認する。また、新聞以外の書きことば、話しことばを対象とする間テクニスト的な調査の必要性を今後の課題とすることも述べる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、従来、主として造語論的・位相論（俗語）的な立場から扱われることの多かった略語について、その使用と定着の要因を解明するという新たな問題設定を行い、それをコーパス言語学の方法による大規模調査に基づいて実証的に追究した、意欲的な論考である。略語については、これまで、原語からどのようにしてつくられるのかという造語の側面や、若者語や専門語においてどのような略語が使われているかといった位相の側面がもっぱら問題とされ、そもそもそうした略語がどれほど使われ、なぜ定着する（しない）のかが問題とされることはほとんどなかった。本論文は、現代の新聞というレジスターに限られるとはいえ、大規模なコーパスを用いて現実の略語使用の実態を明らかにし、略語の定着・不定着の諸要因を言語使用研究の立場から探った先駆的な研究といえる。

規範的な書きことばと考えられる新聞にも、多くの略語が使われていることを明らかにし、略語と原語との量的関係の変動が8種のタイプに整理し得ることを見出したこと、「コンビニ」「携帯（ケータイ）」という具体的な略語をとりあげて、その使用と定着・不定着の要因を多面的に検討し、とくに、カテゴリー的意味という新しい意味のとらえ方のもと

に、原語に対する略語の使われやすさ（略語使用率）がカテゴリー的意味の違いによって決定される傾向のあることを見出したことは、本論文の大きな成果である。

ただし、本論文には、克服すべき課題も少なからず残されている。調査対象とした略語の選定基準が必ずしも明確でなく、調査すべき略語がなお残されていること、単一のコーパスを用いたために、経年的な調査の期間が固定され、使用期間の異なる略語の変化をとらえきれていない可能性のあること、対象語のカテゴリー的意味をとりだす基準が必ずしも明確でなく、カテゴリー的意味によって略語使用率が決まるということの解釈・説明が十分とはいええないこと、略語の定着過程の中で新聞というメディアがどのような役割を果たしているのか、その位置づけについての考察が望まれること、などである。

とはいえ、本論文が、略語使用のコーパス言語学的研究という新領域を開拓したことは明らかであり、これらの課題もその価値を損なうものではない。なお、2012年1月25日に本論文の公開審査を行い、最終試験を終えた。以上により、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。